在日語作文課程中以閱讀感想文作為任務的學習效果
—“17+1 週”實踐報告—

橫川彰

靜宜大學日本語文學系講師

摘要

從 110 學年下學期開始，靜宜大學開始試行「17+1 週教學」。新學期從傳統的 18 週縮短了一週為 17 週。本研究以「17+1 週」的「+1」部分，針對大三學生修習的「進階日文習作」之試行課程活動的實踐報告。

初步調查顯示，學生平時手上的書籍大多是與日語能力考試或語法練習相關的教科書，較少涉及教科書以外的書籍，對其他類型的書籍興趣較低。就教學現場觀察,學生進入大學後閱讀量明顯減少，因此，本課程在 110-2 學期在「+1」周的課程程設計一份閱讀作業。每位學生須閱讀一本書並寫下讀後感想。透過這個活動設計，探討這份閱讀作業是否適合作為「17+1 週教學」日文寫作課程的任務。本文採用人工智能文本挖掘分析的方式，針對閱讀對學生心理狀態的影響進行問卷調查和訪談分析，並對調查結果進行更深入的反思。

關鍵詞：閱讀、17+1 週教學、日文習作、問卷調查、文字挖掘

受理日期：2023 年 08 月 29 日

通過日期：2023 年 10 月 20 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202312_(41).0003

The Learning Effect of Reading Response Essays as Assignments in Japanese Composition Classes: "17+1" week Practical Report

Yokokawa Akira

Lecturer, Department of Japanese Language and Literature, Providence University

Abstract

Starting from the second semester of the 110th academic year, Providence University adopted a "17+1" –week semester. The new semester was one week shorter than the previous 18-week semester. This research uses the "+1" part of "17+1 week" as a practical report on the pilot course activities conducted in the Advanced Japanese Writing class for junior students. The preliminary research showed that most books students usually have are textbooks related to the Japanese Language Proficiency Test (JLPT) or grammar exercises; students are less interested in other books. According to the observation on the teaching site, the amount of reading students have done has decreased significantly after entering the university.

Therefore, in the "+1" week in the 110-2 semester, a reading assignment is assigned in this writing course. Students need to read one book and write a report after reading it. This study explores whether this reading assignment is appropriate for a writing course. This paper adopts the artificial intelligence text mining method, conducts a questionnaire survey and interview analysis of the impact of reading on students' psychological state, and shows more in-depth reflection on the survey results.

Keywords: Reading, "17+1"-Week, Writing Class, Questionnaire Survey, Text Mining

日本語作文授業における課題としての読書感想文の学習効果
―「17+1 週次教學」の実践報告―

横川彰
静宜大学日本語文学系講師

要旨

民国110年度後期から、静宜大学では「17+1 週次教學」を試行することになった。従来の1学期18週間の授業体制から、1週間短縮し新学期に臨むことになったのである。本研究では、この「17+1 週次教學」の「+1」の部分を利用し、大学三年生が履修する「進階日文習作」授業で試みた実践報告である。

予備調査では普段学生たちが手にする本は、日本語能力試験検定に関するテキスト、または文法練習に関するものが多く、教科書以外の本には興味が薄かった。学生たちの大学入学後の読書量が著しく少ないことに気づき、今学期は各学生に1冊の読書課題を与えることにした。各学生には読書後に感想文の提出を求めた。今回の活動を通じ、読書が「17+1 週次教學」の課題として適切であるかという点に注目した。読書が学生の心理状態にどのような効果を与えるのか、アンケート調査及びインタビュー分析を実施し、調査で得られた結果をより深く考察するために本稿では、AIのテキストマイニング解析を利用した。

キーワード：読書、17+1 週次教學、作文授業、アンケート調査、テキストマイニング

日本語作文授業における課題としての読書感想文の学習効果
―「17+1 週次教學」の実践報告―

横川彰
静宜大学日本語文学系講師

1. はじめに

110年度後期から、台湾の中部に位置する静宜大学では「17+1 週次教學」を試行することになった。従来の1学期18週間の授業体制から、1週間短縮し新学期に臨むことになったのである。その短縮した1週間分の授業は、通常の教室以外での活動が求められ、授業活性化を目的とした課題などを学生に与えるという、教師と学生の新たな教育システムを目指す挑戦といっていい。本研究では、この「17+1 週次教學」を大学三年生が履修する「進階日文習作」授業で試みた活動を報告する。

まず、今回の試みを実行するにあたり、新学期最初の授業で学生たちと新しいシステムである1週間分の活動で何を求め、活動できるのかを相談した。相談の過程において、普段学生たちが手にする本は、日本語能力試験検定及び文法練習のテキストが多いことが分かった。そして教科書以外の本には興味が薄く、学生たちの大学入学後の読書量が著しく少ないことに気づき、今学期は各学生に1冊の読書課題を与えることにした。学生が読む本は、基本的に各自自由に選択し、雑誌と教科書以外の日本語の本、または日本語で書かれた本の中国語翻訳本を選択し、読み終わった後に感想文を書かせる課題を与えた。感想文については日本語で書くことを求めた。今回の活動を通じ、学生たち自身が選んだ本にも注目するとともに、読書が学生の心理状態にどのような効果を与えるの

か、読書が学生たちにもたらす意味に注目する。更に、読書が作文授業や「17+1 週次教學」の課題としてふさわしいかを、アンケート調査及びインタビューを実施した。そこから得られた結果を、より深く考察するために、本稿ではAIのテキストマイニング解析ソフトを利用した。

2. 研究目的

日本の全国大学生協連の第 57 回学生生活実態調査[1]が実施され、大学生の 50.5%が一日の読書時間が 0 分であった。このような本離れは今に始まったことではない。立花隆と司馬遼太郎の対談の中で、司馬は、オウム地下鉄サリン事件後のことを例に挙げ「この事件が起こってから、小説の売れゆきが落ちたらしい。テレビのドラマを見ている人も現実のオウム報道のほうが、人間とは何か生々しく語っているので、アホらしくなったと言っていました。」（立花（2021）p.64）とテレビドラマに登場する俳優以上に、人間一人ひとりが発信する情報が本やドラマの魅力を上回ると指摘する。現在、多くの人々が利用する SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）やインターネットの動画配信サービスなどが登場する以前から本離れが進んでいたのである。

その一方、台湾においても本離れの動きが確認できる。大学生を中心とした図書館利用だが、民国 105 年（2016 年）の調査開始以降、平均来館者数、平均貸出冊数、平均予約冊数はいずれも減少傾向にある。民国 108 年（2019 年）から 109 年（2020 年）の間には、来館者数は 20.73%減少し、貸出冊数は 17.4%減少、そして図書予約冊数も 5.39%減少した[2]。新型コロナ感染拡大以前から、本を手にすることが台湾でも減少

[1] 全国大学生協連:https://www.univcoop.or.jp/ (2023.08.01)
[2] 國家圖書館：https://www.ncl.edu.tw/periodical_304_1127.html(2023.06.28)

が続いているのである。

では、学生に読書の必要はないのであろうか。文化庁が2019年におこなった調査「平成30年度『国語に関する世論調査』」[3]の結果においては、「自分の読書量を増やしたいと思うか」との質問項目がある。結果は、「そう思う」が28.0%、「ややそう思う」が32.4%となり、両者を合わせると「そう思う」は60.4%である。前回平成25年度の調査結果に比べると6ポイント減少しているものの読書の必要性及び意義があるとうかがえる。

酒井（2018）は、人の脳に入力される情報は、「『文字＜音声＜映像』の順で増えていく。想像力で補わなければならない情報量は、これとは逆の順番になる。つまり文字は、入力される情報量が音声や映像に比べて少ないため、想像力で補う部分が多くなる」（坂井2018：pp.14）と読書をおこなうことにより思考力の向上を補えると説く。

前述したが事前調査においては、大学入学後、本をほとんど読んでいない学生が目立った。文学系を履修する学生たちがこのまま本を手にする機会が無いまま卒業を迎えてよいものだろうか。この点は現場の教師として危惧すべき点であり、注目したいと思った点である。そして、読書の習慣がない学生にとって、読書課題は「17+1 週次教學」導入の課題としてふさわしいものなのかを明らかにするため、今回の調査をおこなった。

3. 先行研究

武（2014）は初級前半から中級前半の日本語学習者を対象に、「書評を書く活動」を実践した。活動は15週間の期間で

[3] 文化庁：https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_02.pdf(2023.08.01)

おこない、一度の授業は 90 分であった。課題で使用した資料は、教師及び学生が用意した本であり、計 7 冊の中から各自が選択する。読書体験を実践した成果として「初級や初級を終えたばかりの学習者にとって、読みたい本は素敵な言葉の宝庫」（武他 p.162）であるとともに、読後に他者に本の紹介をする、またはされる行為は今後日本語学習を継続する上でアウトプットする自信を得られると考える。

工藤（1999）は、書くことが苦手な子供たちを対象に、子供たちが最も好きなマンガを使用して作文の苦手意識を克服しようとした試みをおこなった。教材として「コボちゃん」（四コマ漫画）をすすめている。四コマ漫画を使用することにより、作文で「書くことがない」「書き方が分からない」などの問題を持つ子供たちであっても、苦手な作文を克服できると提案をし、「四コマの展開を、文字に翻訳することは、自然にそして具体的にできることです」（工藤 1999、p.17）と起承転結に沿って書けば、書くことに困らずに作文ができると述べる。この「四コマ漫画」を取り入れる授業は台湾でもすでに導入している教育機関もあり、2017 年 6 月に台北で開催された財団法人日本台湾交流協会研修会「アニメの魅力を生かした新しい日本語教育」でも紹介された作文能力向上を目的とした練習方法の一つである。

一方、台湾における日本語学習者の作文クラス活動研究として、曾（2019）は、エッセイを教材にし、学生自身の個人経験を交え、作文課題として提出させた。エッセイは 2 コマ（100 分）で読み、作文で必要な説明をおこなっている。なお、学生たちが提出した課題は AI テキストマイニング技術を使用し、解析をおこなった。羅曉勤（2008）においては、作文を書く前の準備として「思考マップ」の作成を作文指導に取り入れた。これにより、ただ書き始めるという行為を避け、文章構成を構築することにより、書く力だけではなく、

文章を考える力も養えるのである。そして黄（2023）は、台湾における作文教育の現状、研究を包括的に分析した。その結果の一つとして、「今後は台湾人教師が台湾人学習者の特徴に配慮した文章作成過程を支援する教材を開発することが望まれている」（黄 2023：p.61）と指摘する。それぞれの研究結果、及び過程から本研究に対し有意義な情報を得られた。しかし、本研究の意義である「17+1 週教學」の取り組みには、教室外活動を求められるという活動の制限がある。そのため自由課題としての本選び、そして感想文を学生たち主導で実施することを試みた。先行研究の採用に至らなかったのは、例えば工藤（1999）が考案した四コマ漫画の作文であるが、以前、筆者の基礎作文授業で取り組んだことがあった。作文を書くことには困らなかったものの、全ての学生の書き始めから結末が似たようなものになり、作文上級者であった学生からは、自分で考えたことを自由に書いてみたいとの要望があった。武（2014）、曾（2019）の実践も作文授業内の活動としては、興味深い課題である。しかし「17+1 週教學」は各学生の自由課題としての試みが強く、また学生一人ひとりの負担を考慮すると、選書については、学生たちに任せることが望ましいと考えた。また、この学生自身による選書が、羅（2008）の作文前の準備である執筆前の「考えること」の 1 つに繋がると言えよう。学生自身が手に取った本は、黄（2023）の指摘する「文章作成過程を支援する教材」を生み出すヒントにもなるとも考える。先行研究を踏まえ、学生たちがどのような本を手に取り、日本語で感想を述べるのか注目した。

4．調査

本研究の調査協力者は、台湾の台中市にある静宜大学日本語文学系で進階作文を履修した学生 22 名である。内訳であるが、2 年生 2 名、3 年生 19 名、4 年生 1 名となる。日本語既

習時間であるが、高校時代から日本語を学んでいる学生も履修している関係で、学生間の日本語のレベル差がある。既に日本語能力試験 1 級に合格している学生も何名か確認できたが、日本語能力試験 2 級に合格した学生、或いは合格を目指す学生が多く、今回の調査協力者の日本語能力は中上級と見なすのが妥当である。本課程は日本語文學系三年生を対象とする必須科目であり、約 2 時間（1 コマ 50 分×2 コマ、10 分間の休憩を挟む）計 17 週間でおこなった。調査期間は 2022 年 2 月から 2022 年 6 月である。

調査方法は、学期始めから学期末試験前までに、各学生が 1 冊の本を読み、その本に関しての読書感想文を提出することとした。本研究対象の作文授業では、二週間に一度、日記の提出を課題としている。読書感想文は、学期中の何れからの日記（一回分[4]）に書くこととした。この点も学生の負担を考慮したからである。なお、学生からはどのくらいの文量を書けば良いかとの質問があったのだが、今回は初めての試みということもあり、文量に関しての特別な取り決めは示さなかった。しかし、以下のことを決まり事として提示した。①本の名前、作者を書くこと。②なぜ、その本を選んだのか。③あらすじは書かないこと。(ただし簡単な話の流れは書いても良い）④本のどの部分が印象に残ったのか。またその理由を書くこと。以上の点を中心に読書感想文の提出を求めた。そして、学期末に、読書アンケートを各学生に配布し、質問に答えてもらった。読書感想文も読書アンケートも日本語作文授業に関わることを考慮し、日本語で書くこととした。読書感想文提出後、ボランティアで 4 名の学生には追加インタビューに応じてもらい、インタビューの模様は、調査協力者の同意を得て、撮影及び録音をし、その後インタビュー内容

[4] 読書感想文についての評価だが、提出した学生には日記一回分の点数を与えた。

を文字化した。最後に、学生から得られた「17+1 週次教學」の感想を、テキストマイニングソフトである「User Local 社 AI テキストマイニング[5]」を利用した。AI のテキストマイニングで解析をすることにより、学生たちが書き残した「17+1 週次教學」を終えた感想を客観的により深く考察できる。そして使用された言葉の数量を可視化するのに加え、AI により文章から得られたデーターで感情分析や話題分析もおこなえると考えたからだ。学生が読書後に書いた記述文をさまざまな角度から検討をする。

5. 調査結果と考察

5.1 読書量及び読書本

表 1 大学入学後の読書量

学生番号	大学入学後の読書量[6]	「17+1 週次教學」で学生が読んだ本
1	4 (1)	サド侯爵夫人（日本文学）
2	5 (2)	犬から聞いた素敵な話（現代小説）
3	2 (0)	猫を棄てる（随筆・エッセイ）
4	2 (1)	食堂かたつむり（日本文学）
5	50 (5)	大人の 11 回の作文授業（台湾文学）
6	4 (1)	されど服で人生は変わる（ファッション・エッセー）
7	4 (2)	クスノキの番人（推理小説）
8	1 (1)	君の膵臓を食べたい（現代小説）
9	30 (1)	SPY×FAMILY（コミック）
10	10 (2)	魔法少女育成計画（ライトノベル）
11	3 (1)	台湾まんぷくスクラップ

[5] User Local AI テキストマイニング https://textmining.userlocal.jp/（2023 年 8 月 2 日）
[6] ( )内は日本語で書かれた本。

		（紀行文・旅行記）
12	2　(1)	君が彼らを悪魔と呼んだ頃（コミック）
13	5　(0)	
14	2　(1)	妻、小学生になる（コミック）
15	4　(1)	山と雲と蕃人と（紀行文・旅行記）
16	4　(0)	86-エイティシックス-（ライトノベル）
17	2　(1)	東京喰種トーキョーグール（コミック）
18	30　(2)	人間失格（日本文学）
19	3　(1)	世界から猫が消えたなら（現代小説）
20	10　(4)	100万回生きたねこ（絵本）
21	10　(5)	日本の仏（歴史・仏教）
22	30　(3)	いぬやしき（コミック）

まず学生たちの読書量を図表1に記載した。アンケート調査は学期末に実施し、今回の読書課題も数字に含まれている。大学入学後10冊以上読んだ学生は7名（31.8%）、4冊から9冊では、7名（31.8%）であった。一方、3冊以下の学生は8名（36.4%）だった。この結果だけを見ると、学生の3割以上は入学から今まで年間一冊未満の本しか読んでいなかった。そして、10冊以上読むと答えた学生も同じく3割ほどいた。多読している学生が読書する理由として、次のように語った。

「他の人から本を薦められたりします。また、最近は電子書籍ストアの無料で読める本などが選べます」(学生5)

「自分の興味のある分野の本を選びます。自分の興味のある本を選んで読むと、知識が増えるだけではなく、読むことも楽しめるので、素晴らしいことだと思います」（学生20）

調査協力者の学生5は普段、中国語で書かれた本を中心に読書をしているが、いつでも無料で気軽に読める電子書籍の存在が大きいと述べた。手にする本は友人からの紹介が多いようだ。読書は「自分の思考を定着させたり、掘り下げたりする作業は、一人の空間・時間でなければできない」（齋藤（2015）p.12）との考えもあるが、インプットだけによる読書より、周囲の誰かと本の内容を共有、またはアウトプットをすることによって、より読書に深みが増すと考える。

調査協力者10番の学生は、「普段から大学の図書館で好きなジャンルのところを回って、興味がある本があれば読んでみる」と普段の習慣が読書に結びついているようだ。大学の図書館の利用についてはアンケート、インタビューの中でも度々聞かれ、ほぼ毎日のように授業の合間に通い、好きな本を手にすると言った意見も聞かれる一方、読書量が少なかった学生からは、本に興味がなく、図書館を利用する時は同級生と図書館の会議室を利用する際に限るという答えの他、大学入学時のオリエンテーション以外、足を運んだことが今までなかった、また日本語の本が図書館のどこにあるのか良く分からないという声もあった。

5.2 課題提出について

今回の課題提出に取り組む期間は課題発表から学期末試験までの約3か月半の時間があった。早期に提出を試みた学生もいたが、締め切り期限間近になって提出する学生も見受けられた。その中で1名、本を読まず、課題を提出しなかった学生がいた。以下がアンケートに記載された課題未提出の返事である。

「他の学科の宿題が多く、学校の先生に頼まれた絵を描くアルバイトも忙しかったです。そして、日本語能力試

験の準備もあって、(本を読む)時間がありませんでした」（学生 13）

学生 13 は、現在複数専攻している。出席も授業態度も問題ないのだが、普段の作文課題の未提出が数回あった。学生 13 は、絵や写真に興味を持っていて、どうしても文章を読むことより、そちらを優先してしまうと述べていた。また、長文を読むと、疲労感があるとアンケートの答えにあった。今回の課題には絵本、漫画も有効としたが、その点もしっかりと理解していなかったようだ。

一方、本研究の調査中、読書後の課題提出ができるか心配していた学生が数名いたが、この学生たち 5 名は今回コミック（漫画）を選択した。学生 12 は今回の課題で、コミックではあるもののはじめて自身で日本語の本を探して読み、その感想を書いた。学生 12 は筆者の作文授業を二年間履修した。筆者の作文授業では、二週間に一度、学生たちに日記の提出を求めている。学生 12 の日記では、毎回週末に食べたもの、観たものを中心に書かれており、それは大学三年生になっても続いた。時折、筆者からのコメントとして、普段の生活で異なるテーマを見つけ、それを書くことを勧めてみたものの、その後も変わらず行動報告のような日記が続いた。本人は、毎回の日記で書きたいテーマが見つからず、苦悩していたようだった。しかし、今回の「17+1 週次教學」の課題で、学生 12 の書いたものは、内容も量も普段の課題を上回るものであった。特に、下記の図 1 は学生 12 が実際に書いた感想文であるが、文量は普段の日記課題の 3 倍以上書かれていた。

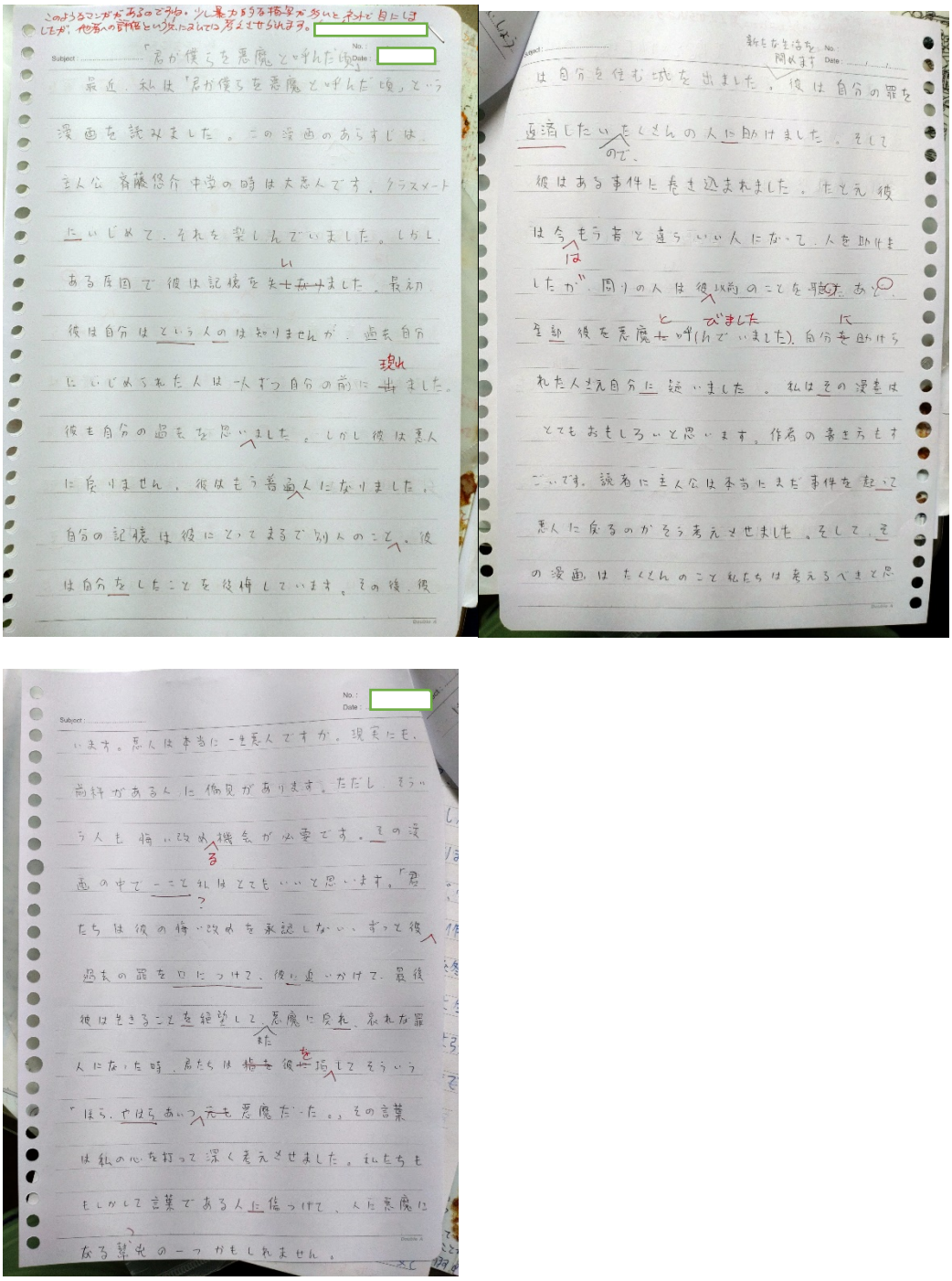

図 1 学生 12 の感想文

学生 12 はアンケートの感想として「本の中には面白い表現がたくさんある」と述べていた。今回、コミックを選択し、感想を書いた学生たちの感想文は普段の日記課題で書く字数

を 1.5 倍から 3 倍と大きく上回った[7]。4 の調査項目において前述したが、今回の読書感想文では文量を定めなかった。それにも関わらず、学生たちは普段の日記課題以上の文字数で作文を書き提出した。同じくコミックを選んだ学生 17 からは、感想文も絵と文（漫画）で表現したいとの要求もあったが、今回は文章だけにしてもらった。コミックは普段から学生が好む読み物であり、普段授業で使用する教科書以上に、親しさを感じるのではないか。向後智子、向後千春（1998）の調査では、コミックとコミックのセリフ部分をシナリオのような形で文章にし、大学生 97 名を対象にコミックからの内容理解を分析した。コミックを教材とした結果として、「マンガ表現の持つ面白さや新奇性の効果から学習者に注意をひき、さらにそれによって状況モデルが作りやすくなり、何が問題とされているのかが明確になる」と示唆する。更に熊野、廣利（2008）もアニメや漫画が日本語学習者の日本語を学ぶきっかけとし、「教科書のような日本語に『アニメ・マンガ』を絵として利用するより、『アニメ・マンガ』そのもの、あるいは『アニメ・マンガ』によく現れるが辞書などで調べにくい話し言葉などの表現や『アニメ・マンガ』特有の表現を理解する助けを求めているようである。」（熊野、廣利（2008）p.65）と述べるようにアニメ、そしてマンガから日本語を学ぶことを楽しんでいるのである。普段の教科書を題材とした作文提出と異なり、コミックを読むことによって、描かれた内容を理解し、自分で感じたことを普段の課題に比べ、字数を増やして書ける行為に関しては、今後研究を進めていく必要があると考える。

5.3 読書課題の感想

「17+1 週次教學」の読書課題についての学生たちからの感

[7] 本研究では全ての学生が手書きで感想文を書いたため、行数での計算となる。

想であるが、学生 6[8]を除く全てが読書は日本語学習に役立つと感じているようだ。以下が学生たちの述べた感想である。

表 2 「17+1 週次教學」読書課題の感想

学生番号	感想
1	とても役に立てると感じました。どうやって自分の思いを文字で表すのかは重要なことです。読書は他の人がどのように自分を表現するのかを学べます。
2	役立つと思います。特に原書を読むことです。
3	私は日本語学習に役立つと思いました。私が読んだ本は中国語の翻訳ですが、日本語で感想を書きました。作文の練習ができます。
4	作文にもっと多くの考えを持つことができます。
5	読書は、日本語学習に役立つと思います。ひとりで生活の中で学ぶことは限りがあります。しかし、読書は様々な分野においての知識がもらえます。たくさん本を読めば、良い文章と悪い文章の違いがわかって、自然に文章を書けると思います。
6	実は私は日本語の学習に対してあまり助けにならないと思って原書ではなく、翻訳した本を読みました。しかし、原文の本を探して、もう一度読めば日本語が進歩すると思います。
7	自分の興味がある本から学ぶことができます。本の中で、わからない内容を理解するために、辞書やネットで調べます。しかも本から学んだ新しい単語や文法は深い印象が残ります。
8	もっと日本人らしい日本語の表現を学ぶことができます。
9	読書は、日本語学習に役立つと思います。読書後、(他の

[8] 学生 6 は感想にあるように、その後原書で改めて読み、以前に比べ、読書に興味を持ったと話していた。

日本語文章が）読みやすく、理解しやすいです。

10　役立つと思います。私が読んだのはライトノベルなのですが、文書を書く時、自分の創作など、どこでも約に立てると思います。

11　はい、読むスピードが速くなりました。知った単語も多くなりました。

12　役に立つと思います。本の中には面白い表現がたくさんあります。

13　自分の専門知識と近代の評論を分かち合って楽しいです。

14　役に立つと思います。「妻、小学生になる」という漫画が今年ドラマ化され、私も見ました。この本を読んだ後、もっと単語を覚えられたと思います。

15　読書後、多くの新しい単語を学びました。

16　読むスピードや読解力は明らかに向上したと思います。

17　いろいろな文章の表現方法を読めて、とても役に立つと思います。

18　役に立つと思います。たとえば、文章を書く順序をどうするのか、面白くなりました。

19　私は読書後、感想を書いて、作文授業に役立ちました。

20　役に立つと思います。本を読むこと、すなわち新しい知識を増やします。読書は養分のようで、私は小さな苗で、小さな苗木は養分を与えると、いつか美しい木になります。

21　役に立つと思います。なぜかというと、本に知らない単語などが必ず出ます。その単語を知るためにいろいろ調べなければなりません。それで、いろいろ日本語の勉強ができるからです。

22　役に立てると思います。何べんも見た言葉はその使い方が上手になると思います。

総じて、読書課題に好意的な意見が目立った。授業で学ばない言葉、表現が身についた点、また読書スピードの向上を良い点としてあげている学生が多い。言葉に関していえば、大学三年生になると、教科書に記載されているものに慣れ、何か新しい刺激のようなものを欲する時期なのかもしれない。特に、アニメやドラマなどに興味を持つ学習者にとっては、実際に日本人が手にする本を読むことによって、より日本語母語話者が使用する日本語に近づくことへの喜びを感じているようだ。また 5 番の学生が指摘するように、同じ日本語でも良い文章と悪い文章があることに気づき、作文に用いる良い文章を学習できたことは、読書の一つの成果といえるのではないか。

5.4 テキストマイニングを用いた解析結果

本稿では 5-2 で学生が述べた「17+1 週次教學」読書課題の感想を AI 技術のテキストマイニングを用いて解析を試みた。テキストマイニングの分析手法を用いることで、学生たちが抱く課題への考えを可視化できるとともに数量的に分析できると考えた。

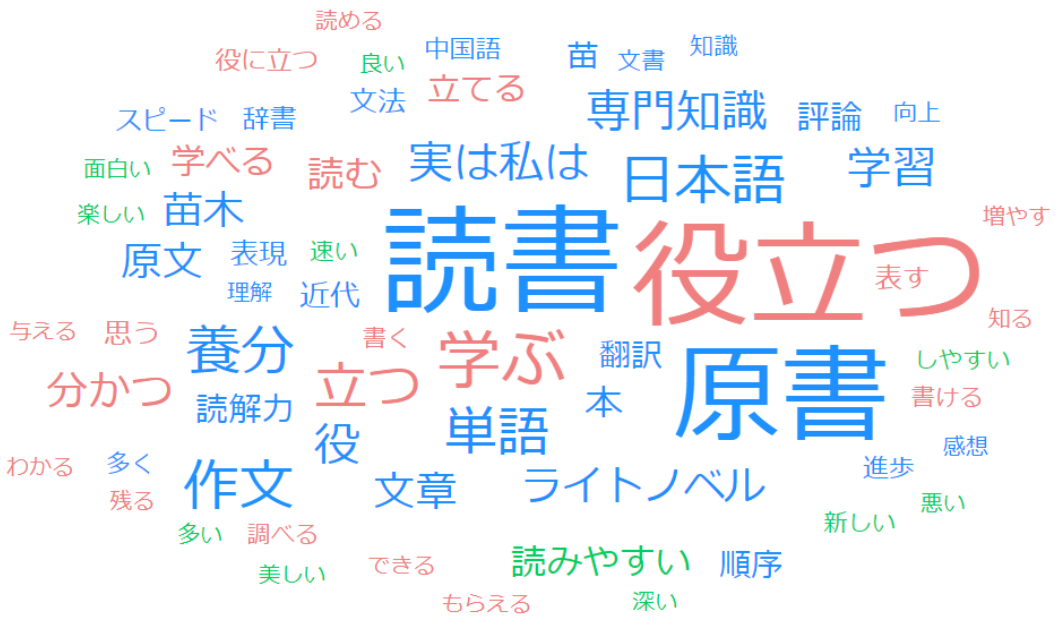

図 2 ワードクラウド

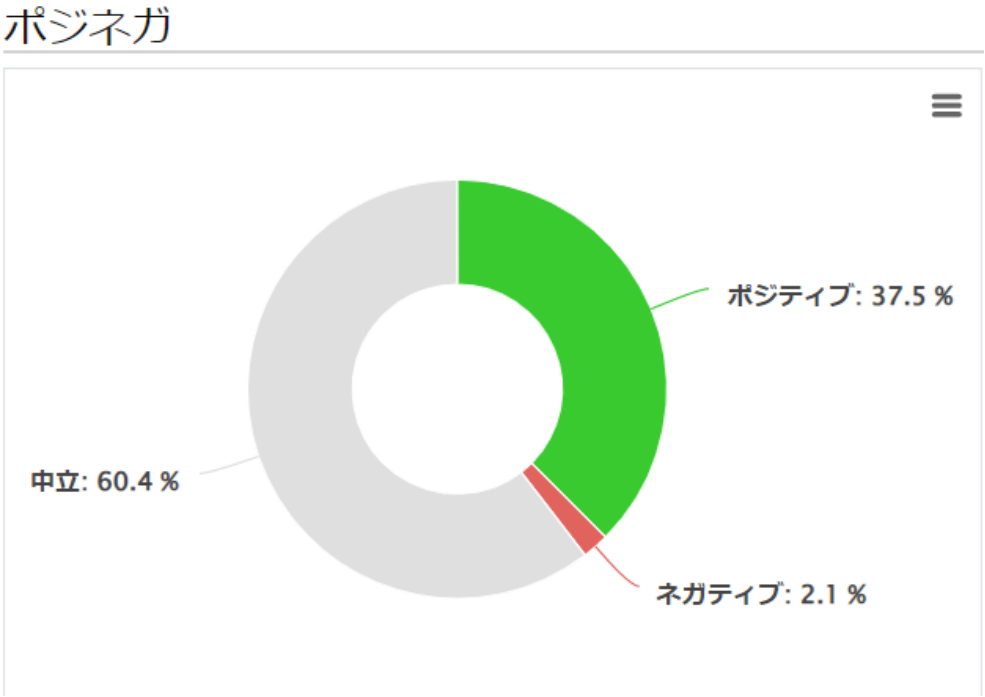

図 3 ポジネガ分析表

名詞	スコア	出現頻度
本	1.41	11
日本語	2.86	9
役	2.17	9
読書	8.31	8
単語	2.70	6
文章	1.79	6
学習	1.97	4
表現	0.60	4
作文	2.91	3
原書	7.27	2
養分	2.82	2
翻訳	0.80	2
スピード	0.32	2
多く	0.22	2
知識	0.17	2

図 4 単語出現表（名詞）

動詞	スコア	出現頻度
思う	0.21	19
読む	0.49	10
立つ	0.93	7
学ぶ	1.27	5
できる	0.03	5
役立つ	2.84	4
書く	0.08	4
立てる	0.33	3
知る	0.02	3
調べる	0.05	2
わかる	0.01	2
分かつ	0.60	1
学べる	0.41	1
表す	0.17	1
役に立つ	0.12	1

図 5 単語出現表（動詞）

形容詞	スコア	出現頻度
新しい	0.08	3
面白い	0.02	2
読みやすい	0.44	1
速い	0.07	1
しやすい	0.07	1
美しい	0.03	1
深い	0.02	1
悪い	0.00	1
多い	0.00	1
楽しい	0.00	1
良い	0.00	1
---	---	---

図 6 単語出現表（形容詞）

■名詞 - ■動詞

名詞 - 動詞	スコア	出現頻度
本 - 読む	1.82	4
日本語 - 役立つ	2.40	3
学習 - 役立つ	2.40	3
読書 - 役立つ	1.20	2
感想 - 書く	1.20	2
本 - 学ぶ	1.00	2
原書 - 読む	0.55	2
思い - 表す	1.00	1
文字 - 表す	1.00	1
読書 - 学べる	1.00	1
読書 - もらえる	1.00	1
表現 - 学べる	1.00	1
表現 - 読める	1.00	1
本 - 探す	1.00	1
作文 - 持つ	1.00	1

図 7 係り受け解析（名詞-動詞）

図 2 のワードクラウドスコアだが、文章における単語の出現頻度数選び出し、その値に応じた大きさで図に示される。単語の色は品詞の種類で異なっており、青色が名詞、赤色が動詞、緑色が形容詞、灰色が感動詞を示す。図 4 から図 5 と合わせてみると「役立つ」が多いことが目立った。そして、係り受け分析においても、「日本語―役立つ」「読書―役立つ」が上位を占めた。学生たちがアンケートに残した文章は短いものであるが、それでも「役立つ」という言葉を感想に多く使用されたことから、読書は日本語を学ぶ上において一定の成果をあげているといえる。図 3 のポジネガ分析だが、感情分析 AI の一つの分析結果であり、文章におけるポジティブな感情とネガティブな感情の存在比を示しているものだ。ここでも「役立つ」「学ぶ」などが目立つことになったことで、読書課題に対してポジティブな感情が見られる結果となった。

このようなポジティブ要素を今後も作文授業において高い比率を保つためには、国立国語研究所教授石黒の指摘を参考

にしたい。石黒は自身の SNS（ツイッター[9]）上[10]において、作文の弊害として「①テーマを教師に強制されやすい⇒書きたいことが書けない②読み手⇒教師になりやすい⇒宛先不明の文章になる③書く目的がはっきりしない⇒練習のための練習になる」と指摘する。自分が好む本を自身で見つけ、読後の感じたことを文章にしてみることが学生たちにとって普段と異なる何らかの作文達成感を得られるのではないだろうか。学生たちの本当に書きたいことは何か、この問題を今後の課題として探求することが作文能力向上に繋がると考える。

一方、「17+1 週次教學」の課題としての負担であるが、学生 1 は作文授業での読書課題は問題なかったが、他のクラスでも提出が求められた「17+1 週次教學」課題が多く、特に学期末はグループでの課題もあり本当に大変だったと語る。「17+1 週次教學」もしくは、将来の「16+2 週次教學」導入を考慮すると課題の出し方について教員は継続的に検討する必要があるのではないか。

6. まとめ

実は、今回の読書感想文を課題として実施する際に一人の学生から、「中学生見たいな宿題ですね」と言われたことがある。筆者自身も、わざわざ大学生に（教師から）本を読ませるのは少し失礼な気持ちがあった。そのような気持ちを抱えながら、本稿は「17+1 週次教學」という新たな試みを利用したのである。今後、本学では民国 112 年度前期より「16+2 週次教學」に移行する。今回の読書課題が「+2」の学習効果がどのようにもたされるのかは今後も研究継続が必要である。しかし、読書が書くという行為に良い影響を与えることは学生たちが述べた感想から明らかになった。また、今回の調査

[9] 2023 年 7 月より「×」に変更。
[10] 石黒圭：（2022 年 10 月 1 日投稿分、2023 年 7 月 3 日閲覧）

協力者の表には記載しなかったが、他学科に在籍する学生で、日本語作文授業及び日本語能力試験において好成績を得た要因について本人に尋ねたことがある。この学生は、日本語習得の際、文法書や試験対策に関する参考書を利用することが無いと述べていた。その代わりとして、自身が興味を持つ日本語の本を手にすることにより、少しずつではあるが、日本語読解能力、文法理解の向上に繋がったようである。この点でも読書が、日本語学習に好影響を与えると言えるのではないか。現在は、若者を中心に SNS の利用が目立ち、本離れとの関係性を危惧する声がある[11]。日本人作家の村上春樹は、衣料品企業のインタビューで「SNS をいっさいみないのはなぜか」と言う質問に対し以下のように指摘する。

> 「大体において文章があまり上等じゃないですよね。いい文章を読んでいい音楽を聴くってことは、人生にとってものすごく大事なことなんです」[12]

村上の指摘を踏まえると、SNS で目にする文章だけではなく、今回の「17+1 週次教學」の課題のような読書経験を重ねることにより、4-2 で学生 5 が語ったように「良い文章と悪い文章の違いが分かった」ことに繋がる。そして、学生たちの文章判断基準が向上することによって、例えば卒業制作の資料を収集する際に、読書経験が役に立つと考える。

更に、直木賞作家の角田光代は若い時の読書を次のように推奨する。

---

[11] 「10 歳代、20 歳代では、『ソーシャルメディアを見る・書く』、『動画投稿・共有サービスを見る』といった項目の利用時間が顕著に長い」総務省:「令和 4 年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」より。
https://www.soumu.go.jp/iicp/research/results/media_usage-time.html（2023.8.26）

[12] ユニクロ：https://www.uniqlo.com/jp/ja/contents/lifewear-magazine/archives/21ss/haruki-murakami/（2023.07.10）

「本を読めない大人になるというのは、ものすごく恐ろしいことなんです。なぜなら、本によって育つはずの想像力を育てないまま、大人になってしまうということなので」[13]

作文だけではなく、日本語教育で「発想力」並びに「想像力」が必要である。またこれらの能力は、学生たちが卒業後に社会で生きていく上でも不可欠なものであり、発想力、想像力の向上は学生たちの人生をより豊かにするであろう。学生時代の限られた時間で、たとえ課題であったとしても読書を取り入れることは必ずしも無駄なものではないと考える。

今回の調査では、読書課題に注目したが、まだ、課題の条件としては曖昧な点もある。例えば、日本語以外の中国語の翻訳本、文字とともに絵も載っている絵本、コミックも今回の課題読書に含んだ点は、読書課題として成立するかは疑問が残るし、今後更なる条件や調査方法の吟味が必要だと考える。しかし、学生たち、特に読書に興味を持っていなかった学生が授業の課題としてではあるが、本をまず手に取ってみたこと、これを実行できたことは今後の日本学習向上の一歩としたい。

付記

本稿は「二〇二二年大葉大學應用日語學系學術研討會―日語多元教學實踐與研究―」において口頭発表した内容に加筆・修正を行ったものである。

[13] 杉並区公式チャンネル：
https://www.youtube.com/watch?v=1cq2c7vY4Es（2023.07.10）

参考文献（日本語）

跡部千絵美（2011）「ＪＦＬ環境のピア・レスポンスで日本人教師にできることとは―課題探究型アクション・リサーチによる台湾の作文授業の実践報告―」『日本語教育』150号、東京、日本語教育学会学会誌委員会 pp.131-145

緒方智幸（2017）「「語言文化學系」における討論型授業の取り組み―大学生の言語運用能力と社会文化知識形成のための教育を目指して―」『多元文化交流』VOL.9、台中、東海大學日本語文學系 pp.63-78

工藤順一（1999）『国語のできる子どもを育てる』東京、講談社現代新書

熊野七絵、廣利正代（2008）「「アニメ・マンガ」調査研究-地域事情と日本語教材」『国際交流基金日本語教育紀要』(4)、東京、国際交流基金 pp.55-69

黄英哲（2023）「より良い日本語ライティング教育のあり方への探求―台湾の日本語教育の視点から―」『東呉日語教育學報』第 56 期、台北、東呉大學日本語文學系 pp.60-89

向後智子、向後千春（1998）「マンガによる表現が学習内の理解と保持に及ぼす効果」『日本教育工学会論文誌』22(2)、東京、日本教育工学会 pp.87-94

近藤裕美子、村中雅子（2010）「日本のポップカルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」『国際交流基金日本語教育紀要』(6)、pp.1-7

齋藤孝（2015）『読書のチカラ』東京、だいわ文庫

酒井邦嘉(2018)「読書は脳の想像力を高める―なぜ「紙の本」が必要なのか―」『生活協同組合研究』508 巻、東京、生協総合研究所 pp.13-19

曾秋桂（2006）「日本語作文能力向上の方法を探って一大学三年生を対象に」『淡江日本論叢』7 輯、台北、淡江大學日本語文學系 pp.49-68

曾秋桂（2019）「AI 技術による日本語教育への応用－日文習作（二）授業を例にして－」『淡江日本論叢』40 輯、台北、淡江大學日本語文學系 pp.1-18
武一美（2014）「『総合活動型』の作文授業の実際」、武、石黒他編『日本語教師のための　実践・作文授業』、東京、くろしお出版 pp.150-165
立花隆（2021）「オウム真理教と『日本の悪　司馬遼太郎×立花隆』」『「知の巨人」立花隆のすべて』pp.62-73、東京、文藝春秋
三島由紀夫（1983）『葉隠入門』、東京、新潮文庫
横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクション・リサーチ』、東京、凡人社
横溝紳一郎、山田智久（2019）『日本語教師のためのアクティブ・ラーニング』、東京、くろしお出版
吉田昭子（2018）「大学生の読書事情」『生活協同組合研究』508 巻、東京、生協総合研究所 pp.5-12
吉田稔、中川裕志(2010)「テキストマイニングの活用（<特集> データマイニングの活用）」『情報の科学と技術』60(6)、東京、情報科学技術協会 pp.230-235
羅曉勤(2008)「作文指導への思考マップの導入の可能性―「作文Ⅰ」の授業での実践から―」『台灣日本語文學報』24 期、台北、台灣日語教育學會 pp.353-375

参考文献（英語）

Djikic, Maja, Oatley, Keith, & Moldoveanu, Mihnea (2013). Opening the Closed Mind: The Effect of Exposure to Literature on the Need for Closure. *Creativity Research Journal*, 25(2), 149–154.

付録　本調査で用いたアンケート用紙

17+1　『読書アンケート』

履修生の皆さま、

今学期を振り返り、課題の一つとした「読書」についてのアンケート調査をしています。皆さんにとって、日本語を学ぶ上で、読書に対する考えを聞き、今後のクラス運営にいかしたいと考えています。なお、皆さまのプライバシー、個人情報等には、十分に配慮いたしますので、ご協力を賜りたくお願いいたします。

☆読書機会について

1. 大学に入学してから、どのくらい本を読みましたか？（教科書、漫画、雑誌以外）

   (ア)　　約　　冊

2. 日本語の本をどのくらい読みましたか？（読まなかった人は「０」を記入してください。）

   (ア)　　約　　冊

3. 本はどうやって選びますか？　全然本を読まない学生は、「読まない理由」をお願いします。

   ⇒

4. 一日の読書時間は、どのくらいですか？

   分

☆17+1 について

1. 今回、あなたが読んだ本は何ですか？

2. その本をどのくらいの時間で読みましたか？（本を読まない学生は、「読まなかった理由」をお願いします。

3. 読書は、日本語学習に役立つと思いますか？（読書後、作文授業に役立ったことなど、何でも OK です）